

## 政策の時間不整合性 — 物価政策の例

キッドランドとブレスコットのモデルをそのまま現実に応用するのは無理である。しかし、政府あるいは中央銀行と民間のあいだの信頼の問題、将来に向けての展望の問題等について、有用な示唆を含んでいる。

### I. フィリップス曲線モデル

#### A. 経済の構造： ルーカス型供給関数

$$y - \bar{y} = \pi - \pi^e$$

$y$ ： 実際の国民所得，  $\bar{y}$ ： 完全雇用水準の国民所得

$\pi$ ： 物価上昇率，  $\pi^e$ ： 予想物価上昇率

#### B. 経済主体の行動

##### 1. 政府

##### a. インフレーションと失業による社会損失の最小化

$$\min_{\pi} : w\pi^2 + (y - k\bar{y})^2, \quad w > 0, \quad k > 1$$

制約条件

$$y - \bar{y} = \pi - \pi^e$$

##### b. 民間の物価上昇予想に対する政府の反応関数

$$\min_{\pi} : [w\pi^2 + (\pi - \pi^e - (k-1)\bar{y})^2], \quad \pi^e \text{は所与}$$

$$w\pi + (\pi - \pi^e - (k-1)\bar{y}) = 0$$

$$\pi_g(\pi^e) = \frac{\pi^e + (k-1)\bar{y}}{1+w}$$

##### 2. 民間： 合理的期待形成

$$\pi^e = \pi_g(\pi^e)$$

### II. 経済の定常均衡

#### A. 均衡条件

$$\pi = \frac{\pi^e + (k-1)\bar{y}}{1+w}$$

$$\pi = \pi^e$$

#### B. 均衡解

$$1. \text{ 物価上昇率 } \pi = \frac{(k-1)\bar{y}}{w}$$

$$2. \text{ 国民所得 } y = \bar{y}$$

$$\text{損失関数の最小値は } v = \frac{1+w}{w}(k-1)^2\bar{y}^2$$

## III. インフレーション目標をゼロとする政策とその帰結

## A. インフレーション目標ゼロの均衡

$$\pi_g(\pi^e) = 0, \quad \pi^e = 0$$

均衡値

1. 物価上昇率  $\pi = 0$

2. 国民所得  $y = \bar{y}$

損失関数の最小値  $v = (k - 1)^2 \bar{y}^2$

B.  $\pi^e = 0$  を達成後の政府の最適化

$$\min_{\pi} [w\pi^2 + (\pi - (k - 1)\bar{y})^2]$$

$$\pi_g = \frac{k - 1}{1 + w} \bar{y}$$

均衡値

1. 物価上昇率  $\pi = \frac{k - 1}{1 + w} \bar{y}$

2. 国民所得  $y = \left(1 + \frac{k - 1}{1 + w}\right) \bar{y}$

損失関数の最小値  $v = \frac{w}{1 + w} (k - 1)^2 \bar{y}^2$

## IV. このモデルの意味

## A. 時間不整合性が起こる条件

1.  $k > 1$

2. 民間に対する政府の裏切り

3. 短期間（長期には民間は物価上昇率の期待を修正）

## B. 政策の実践に関してモデルから示唆されること

1. ある程度長期的視野の必要

2. 政策に対する民間からの信頼の問題の重要性

3. 外生攪乱要因がある場合の裁量政策の優位性

## 参考文献

Blanchard, Olivier J. and Stanley Fischer (1989) *Lectures on Macroeconomics*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press. Chapter 11.

Tobin, James (1972) "Inflation and Unemployment." *American Economic Review* 62: 1-18.